HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	韓国のアルタイ諸語研究の現状と展望 ： 満洲ツングース諸語研究を中心に
Author(s)	金, 周源
Citation	北方言語研究, 11, 1-15
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97215
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80949
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_03_001_JuwonKIM.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 11: 1-15（日本北方言語学会 2021）

韓国のアルタイ諸語研究の現状と展望[1]
―満洲ツングース諸語研究を中心に―

金　周 源
（ソウル国立大学）

キーワード：ツングース諸語、言語記録、危機言語、言語の多様性、コーパス

1. はじめに

本稿では韓国におけるアルタイ諸語に関する研究について、その現状と研究成果を述べたい。特に満洲ツングース諸語の研究に焦点を合わせ、本文を大きく2つの部分に分ける。前半（第2節）では、絶滅の危機に瀕している満洲ツングース諸語の現地調査、すなわち記録作業 (Documentation) に関して述べる。後半（第3節）では、満洲ツングース諸語に関する研究の現状について述べたい。これらの研究については、概ね最近20年間の研究に限定して議論することにする。

これまでは、アルタイ言語学を専攻するとなれば、当然のように韓国語の系統の研究と直接的または間接的に関連するようになっていた。すなわち、韓国語の系統を確立する比較言語学的研究を主とするものだった。ところが韓国語系統の研究は、韓国語と他の言語との親縁的関係を研究することのみならず、当のアルタイ言語 (Altaic Proper) 間の親縁性の問題とも密接な関係がある。1950年代にはすでにアルタイ語族仮説 (Altaic Language Family Hypothesis) への否定的な見解が出始めたが、韓国の学者たちに影響を及ぼし始めたのは1980年代に至ってからのことだった。特に金芳漢（キム・バンハン）先生が韓国語系統論の懐疑的な見方を発表し続けると、自然とアルタイ言語に関する比較言語学的観点からの研究は減少した。その代わり、言語類型論あるいは地域言語学の観点からの研究が始まったが、その出発点が、あえて言えば、ウイルタ語の調査にあったと思う。もちろん、次節で述べるように、成百仁（ソン・ベギン）先生が台湾でシベ語とダグール語を録音して研究したことも、私に大きな影響を及ぼした。

韓国の現地調査アルタイ言語学は、移住地での現地調査から始まった。このようになったことについては、韓国の特殊事情を理解しなくてはならない。1990年のドイツ統一と1991年のソ連解体という歴史的事件が起こる前、韓国人はアルタイ民族が主に住むソ連、中国、モンゴルなどの共産国家を訪問することができなかった。現地調査は夢にも見ることができず、主に日本にある東方書店、ナウカ書店などを通じて、中国書籍とロシア書籍を入手して読むことがすべてだった。そのような中で、アルタイ言語を直接耳で聞いて言語を記述しなければならないという言語学の基本的な方法を守るために韓国の学者が選ぶことができたのは、ネイティブスピーカーの現地調査ではなく、ネイティブスピーカーの移住地での調査だった（後述）。当然のことながらこれでは満足できず、学問的「渇き」

[1] 本稿の前半部分は、日本北方言語学会第3回大会（2020年11月7日）での「池上二良先生ご生誕100年記念講演」で発表した内容を修正・補完したものである。韓国語からの翻訳は江畑冬生と白尚燁による。

を満たすことができなかったが、幸いなことに時代が変わって韓国人学者が禁断の国家に行くことができる時代が到来し、1990年代末になって初めて色々なアルタイ言語を現地に行って直接調査することができた。

2. アルタイ諸語に関する現地調査研究

本節では、アルタイ諸語、特に絶滅の危機に瀕したアルタイ諸語の現地調査研究について述べることにする。上で述べたように、韓国の事情により、アルタイ諸語の現地調査は1990年代以前までは不可能であった。それでも、アルタイ諸語を直接聞いて研究しようという必要性を感じた成百仁教授が、数回に渡りダグール語とシベ語を移住地である台湾で調査したことがある。

すなわち、1972年4月から12月まで台北でダグール語の第一次調査を行い、1981年12月に第二次調査を行った。そして1972年8月にも台北でシベ語を調査した。筆者は、1986年10月に網走でウイルタ語を調査した[2]。これが韓国での初期のアルタイ言語調査である。

その後、中国を自由に出入りできるようになった後には、次のように活発な言語調査を行った。

2.1. 1997年から2002年までの現地調査

1. 1997.08.　権在一・高東昊　Manchu (Written)
2. 1998.07.～08.　金周源　Solon, Orochen
3. 1999.01.～2002.01.　成百仁・鄭堤文・権在一・金周源・高東昊 等　Solon, Hezhen, Ewenki (Ologuya), Sibe, Dagur

2.2. 研究支援プロジェクト：アルタイ言語現地調査（2003～2013）

ソウル大学言語学科では、韓国アルタイ学会と協力してアルタイ言語を現地調査した。1990年代に始まった言語多様性の維持保全のための言語記録 (Language Documentation) 研究の趨勢に歩調を合わせ、韓国研究財団の支援を受けて次のようなプロジェクトを遂行した。

（1）2003.9.1.～2006.8.31.　韓国語系統究明のためのアルタイ諸語現地調査研究及び音声映像データベース構築

---

[2] ここで私的な話が許されるならば、その時にウイルタ語を調査することができるよう手配をしてくださった池上二良先生と、現地での言語調査を助けてくれた津曲敏郎先生に感謝を申し上げたい（以下の内容は、日本北方言語学会第3回大会（2020年11月7日）で述べた内容である）。1986年10月、札幌にある先生宅を訪問した。私は先生に、ウイルタ人に会って彼らの言語を録音したいと申し上げた。今考えると非常に失礼なお願いをしたのだ。先生はそれ以外に何をするのかと質問なさったが、私はそれ以外には予定がございませんとお答えした。池上先生は翌日、津曲敏郎先生と一緒に網走に行きウイルタ人に会って録音することができるよう、手配してくださった。コンサルタントは小川ウメ氏（1919年生まれ）と、彼女の娘だった。私は1時間30分の間、津曲先生に助けてもらいながらウイルタ語の単語を録音した。約300個の単語を調査したが、その中にたまに日本語での答えがあり笑いが出たりもした。この日の現地調査は、私にとって大きな意味があったのだ。それは私が満洲ツングース語を勉強して最初に耳で聞いた満洲ツングース語だったからだ。

（2）2006.7.1.～2009.6.30.　韓国語系統研究のためのアルタイ言語デジタルアーカイブ構築
（3）2010.5.1.～2013.4.30.　アムール川流域土着民族の言語文化研究

このプロジェクトを通して、同一の質問紙を使用し次のような言語を調査した（2003年～2013年）。

2.2.1. 満洲ツングース諸語（11/11）

Ewen, Ewenki, Manchu, Nanai, Negidal, Orochi, Sibe, Solon, Udihe, Uilta[3], Ulchi（11個）

2.2.2. モンゴル諸語（8/10）

Bonan, Buriat, Dagur, Dongxiang, East Yugur, Kalmyk-Oirat, Mongolian, Monguor（8個）
* 未調査の言語： Mogol, Kangjia（2個）

2.2.3. チュルク諸語（20/34）

Altai, Bashkir, Chulym Turkish, Chuvash, Crimean Tatar, Dolgan, Fuyu Kirghiz, Gagauz, Karaim, Kazakh, Khakas, Kirghiz, Sakha, Salar, Shor, Tatar, Turkmen, Tuvan, Urum, West Yugur（20個）
* 未調査の言語： 省略（14個）

2.3.　質問紙

2.3.1. 質問紙（アンケート）作成の目標

アルタイ個別言語（方言）の基本的な資料を収集し、その言語の音韻・語彙・文法構造を記述しようという目標を立てて、どの地域の言語でも同一の質問項目に基づいて調査をすることで、一目瞭然にその構造を把握し比較対照ができるように構成した[4]。

2.3.2. 質問紙の構成

（1）語彙　合わせて2,770個（1級 250余、2級 550余、3級-4級 1,900余）
（2）基礎会話（日常会話）　16の状況、344文
见面, 访问, 狩猎, 休息, 起床-出发, 天气　［出会い、訪問、狩猟、休息、起床-出発、天気］
饮食, 分配猎物, 商店, 道歉, 治疗, 季节　［飲食、獲物分配、商店、陳謝、治療、季節］
高兴, 离别, 手艺, 喜好1（喝茶的时候）, 喜好2（喜欢的运动）
［喜び、別れ、技術、好み1（喫茶の時）、好み2（好きな運動）］

[3] ウイルタ語は2019年に調査した。
[4] 質問紙を完成させた後に現地調査で使用する過程で何度かに渡って若干の修正が行われたので、すべての質問紙が完全に同一なわけではない。

（3）文法　380文
体言と格標識
用言の文法標識(1)：活用語尾
用言の文法標識(2)：派生接辞
繋辞
補助用言
否定文・疑問文・引用文の構造
特殊構文

2.3.3. 質問紙の使用

中国地域用質問紙に基づいて、ロシア地域用およびモンゴル地域用を作成した。これを印刷して製本するとB5版サイズ210ページ余りの冊子になる。言語調査時には10冊前後を準備して行った。

当該言語が活発に使用されている地域に行って調査をすると、早ければ2日間、遅くとも4日間ですべての項目を調査することができるが、「深刻な絶滅の危機に瀕する言語」(Seriously Endangered Language) 地域に行けば少なくとも4日や5日かかり、場合によっては1-2級語彙さえ終えるのが難しい場合がある[5]。

2.4. 満洲ツングース諸語の現地調査の総合

以下では、アルタイ諸語の三グループの中で、満洲ツングース語派の言語調査についてより詳しく扱いたい。満洲ツングース諸語は韓国と地理的に近く、朝鮮時代に編纂された様々な満洲語書籍もあって関心が最も大きい言語であった。それゆえプロジェクトの期間（2003年～2013年）のみならず、プロジェクトの前後にも関心を持って現地調査を実施した。1998年から2019年までに調査した満洲ツングース語は以下の通りである[6]。

1998 [SO-Hui, Imin, Nantun], [EK-Orochen (Alihe)] など予備調査
1999 [SO-Samajie]
2000 [SO-Dular], [EK-Ologuya]
2001 [NA-Hezhen]
2002 [SI-1Niru]
2003 [SI-5Niru], [EK-Orochen]

---

[5] 韓国の言語学者以外にもこの質問紙により言語を調査したケースがあるのだが、津曲 (2016) がそれだ。ここに記して感謝の意を表したい。その調査では、クラスヌィ・ヤール (Krasnyj Jar) 方言使用者をコンサルタントとする文法票380項目の調査だったのだが、2012年に筆者がグワシュギ (Gvasyugi) 方言を調査したことがあるので、これを対照してみれば二つの方言間の興味深い共通点と相違点を発見することができるものと期待される（訳者注： クラスヌィ・ヤール (Красный Яр) はロシア沿海州のウラジオストク地方に、グワシュギ (Гвасюги) は同ハバロフスク地方に位置する）。

[6] 略語は以下の通り。EK=Ewenki, SO=Solon, NE=Negidal, EW=Ewen, UD=Udihe, OR=Orochi, NA=Nanai, UL=Ulchi, UT=Uilta, MA=Manchu, SI=Sibe. 各言語の名称の後に書いておいたのは、調査地域や方言名称である。

2004 [SI-Tacheng], [EK-Ulan]
2005 [EK-Yak], [EK-Ologuya], [NA-Gorin], [NA-Naikhin], [SI-3Niru], [MA-Sanjiazi]
2006 [EW], [MA-Sanjiazi1], [MA-Sanjiazi2], [UD-Khaba.]
2007 [EW], [MA-Sanjiazi]
2008 [UL], [NE], [OR]
2009 [SO-Nehe], [HZ]
2010 [NE], [UL]
2011 [EK-Amur], [MA-Sijie], [UL]
2012 [NA-Gorin], [UD]
2016 [NA-Achan]
2019 [UT]

以下では2019年に実施したウイルタ語調査について簡単に説明する。筆者は、11個の満洲ツングース語の中で唯一ウイルタ語を調査できなかった。その間、ウイルタ語を調査しようと努めなかったわけではない。サハリンの現地事情を何度も尋ねたことがあるが、ワル (Val) やノグリキに行くための交通の便も悪く現地の治安状況も良くないと聞いた。けれども決定的なのは、現場に行ってもウイルタ語を話すコンサルタントに会えないということだった。つまり絶滅臨迫 (Nearly Extinct) の言語なので話者がいないということだった。

ところが、2017年からウイルタ語を調査し始めた、Andrej Malchukov教授の指導学生であるポーランド人 Patryk Czerwiński 氏が、ウイルタ語を極めて流暢に駆使するコンサルタントがいて、我々が調査しに行く場合に助けてくれるという提案をした。そこで、調査チームを組んで、2019年2月21日から28日までサハリンに行きウイルタ語を調査することができた。Jelena Aleksejevna Bibikova 氏（1940年生まれ）を紹介してくれたのも彼だった[7]。

2019年2月24日、ついに Bibikova 氏に会うことができた。語彙を調査し始めて数分も経たないうちに、感嘆を禁じ得なかった。Bibikova 氏は、筆者が出会った様々な満洲ツングース語コンサルタントの中で最も流暢で有能な話者であった。この方は、池上二良先生や津曲敏郎先生とも何度も会ったことも話してくれた。実は 筆者は、池上二良先生が尽力なさったウイルタ語再活性化 (Revitalization) の努力の結実に直面していたのだ。

筆者にとってはこの時こそが、1986年にウイルタ人に初めて会って以降、33年が過ぎた後の2019年に至ってついにウイルタ語を調査できるようになって、満洲ツングース語現地調査の最終任務を完遂した瞬間だったのだ。

2.5. 絶滅危機言語を記録した出版物

以下は、上で紹介したプロジェクトの遂行中に執筆された本のリストである。

Kim, Juwon, et al. (2008) *Materials of Spoken Manchu*. SNU Press.
Yu, Wonsoo, et al. (2008) *A Study of the Tacheng Dialect of the Dagur Language*. SNU Press.

[7] この場を借りて Patryk Czerwiński 氏に感謝申し上げる。

Li, Yongsŏng, et al. (2008) *A Study of the Middle Chulym Dialect of the Chulym Language*. SNU Press.
Yu, Wonsoo. (2011) *A Study of the Mongol Khamnigan Spoken in Northeastern Mongolia*. SNU Press.
Li, Yongsŏng. (2011) *A Study of Dolgan*. SNU Press.
Kim, Juwon. (2011) *A Grammar of Ewen*. SNU Press.
Ko, Dongho, et al. (2011) *A Description of Najkhin Nanai*. SNU Press.
Kim, Juwon, et al. (2015) *The Life and Rituals of the Nanai People*. SNU Press.

次の本は、言語調査プロジェクトを遂行しながら、その準備過程や調査ツール、コンサルタント等に関する情報や資料の分析と保存方法について書いたものである。

金周源（他）(2008) 『消えゆくアルタイ言語を探し求めて』太学社.
金周源（他）(2011) 『言語多様性保存のためのアルタイ言語文書化』太学社.
崔文禎（他）(2011) 『アルタイ言語現地調査質問紙』太学社.
崔云鎬 (2011) 『アルタイ言語資料の分析とデジタルアーカイブ構築の実際』太学社.

2.6. 同一の質問紙を使用して収集した例文データの価値

ここまで、韓国の学者たちのアルタイ言語の調査研究について記述した。以下では、これまでに調査した資料の中で質問紙の基礎会話編34番に該当する文を、簡略表記 (broad transcription) により提示してみる[8]。言語の分類と提示順序は、満洲ツングース諸語を4語群に分けた Ikegami (1974) に従う。

034. 請抽烟. / Курите, пожалуйста. / Smoke please.

[EK-Orochen 2003] daŋgəji um-kal.
[EK-Ologuya 2000] damga tii-kal.
[EK-Ulan 2004] tamakijə taa-kəlu.
[EK-Ulan2 2004] tama-kalu.
[EK-Yak 2005] damga təj-kəl.
[EK-Ologuya 2005] damga tiǰiŋəs. （［参考］ təgə-kəl. ‘sit.’[9]）
[EK-Amur 2011] damga tii-kal.
[SO-Samajie 1999] damgi im-xa.
[SO-Dular 2000] daŋgə im-kə.
[SO-Nehe1 2009] damgə im-kə.
[SO-Nehe2 2009] damxə im-kə.

[8] 以下の各例文で子音の表記は、ロシアで話される言語と中国のオルグヤ・エウェンキ語の場合には /t/, /d/ などが表記通りに［無声］対［有声］の対立を示すが、中国で話される言語の場合は、/t/, /d/などは［有気］対［無気］の対立を示すので注意を要する。
[9] この場合には、質問を間違って理解して「タバコを吸いますか？」に該当するものであり、「座って下さい」の例文を追加した（下のウリチ語の場合も同様である）。

[NE 2008-1] om-kəsun.
[NE2 2008-2] damga tii-kalu.
[EW- 2006] tabako koolad-li.
[EW- 2007] koolad-lilra təbəkiw.
[UD 2006] damisi-ja gə.
[UD 2012] damisi-je
[OR 2008] damisi umi-xa.
[NA-Hezhen 2001] damxim omi-roo.
[NA-Hezhen 2009] damxi omi ~ si omi-roo.
[NA-Gorin 2005] damaxiwa omisi ~ damaxi omi-o.
[NA-Naikhin 2005] damaxiwa omi-osu.
[NA-Gorin 2012] damaxi(w)a omi-o. ~ omi-roo.
[NA-Achan 2016] damaxiwa omi-osu.
[UL 2008] ʊmʊ-ksu damkije guǰələsəksu.
[UL 2010] damkə umi-i-si. （［参考］ təə-ru. ‘sit.’）
[UL 2011-1] daŋpi(wa) um-u.
[UL 2011-2] daŋpi um-u.
[UT-S 2019] saŋna umm-u.
[UT-N 2019] saŋna umm-u.
[MA-Sanjiazi 2005] -
[MA-Sanjiazi 2006-1] solim damgə omə.
[MA-Sanjiazi 2006-2] -
[MA-Sijie 2011] si daŋgə ume.
[SI-1Niru 2002] daməŋ ɢoči.
[SI-5Niru 2003] daməŋ ɢočiki.
[SI-Tacheng1 2004] daməŋ ɢoči.
[SI-Tacheng2 2004] daməŋ ɢoči.
[SI-3Niru 2005] daməŋ ɢočijə.

以上で示すように、11個の言語を現地調査して、1つの質問文に対して、この場合には37個の答えが与えられており（該当する例文が調査されなかった場合には空白のままにした）、それぞれがその言語の特徴を反映したものだと考えられる。一瞥するだけでも、これら言語間の共通点と相違点が見えるようだ。

まず語彙面から見ると、「タバコ」に相当する単語が極めて多様である。「タバコ」は、これらの言語に17世紀以降に借用されていたはずなのだが、damga (daŋgə, daməŋ), tabako (təbəki, tamaki, damaxi), daŋpi, dami と「煙」を意味する saŋna など、様々である。これらの単語を精密に調査してみると、タバコがこれらの言語に初めて導入されたときの状況を知る助けになるだろう。タバコを吸う行為を示す動詞も様々である。大抵は「飲む」に相当する動詞 umi-, omi-, im-, (Ew) koola-, ɢoči- が使われるが taa-, tii- などの動詞も使用され、

エウェンキ語の1つの方言では tama- が、ウデヘ語では damisi- が動詞語幹として使われている。

これらの文は2人称単数現在命令文であるが、語尾の形態がかなり多様であることが確認でき、その共通点と相違点がすぐに分かる。エウェンキ語、ソロン語、ネギダル語[10]（Ⅰ群）の場合 -kal(u) または -ka で現れるが、エウェン語（Ⅰ群）では -li で現れる。オロチ語（Ⅱ群）では、前者のⅠ群の言語のように -xa で現れる点が特異である。ナーナイ語、ウリチ語、ウイルタ語（Ⅲ群）は -o（または -roo）で現れるが、ウデヘ語（Ⅱ群）では -ja という特異な形式で現れる。満洲語とシベ語（Ⅳ群）では語幹だけで命令形を構成する。

今後すべきことは、これらの資料についての音声音韻研究を精密にして信頼できる音素表記に書き変えることであり、これに加えて各言語（方言）の特徴と言語間の相互関係、これらの言語の類型論的な特徴、それから過去の言語状態の再構などなど、多くの作業を行うことができる。これまでの調査が出発点だったのであれば、これからは本格的な研究を開始して、これらの資料を言語学的に意味のある資料にしていかなければならない。

3. 満洲ツングース諸語に関する研究

本節では、満洲ツングース諸語に関する一般的な研究成果を取り上げることにする。

3.1 満洲語文献と満洲語研究

この節では、満洲語文献に関する研究と満洲語関連の研究をいくつかに分けて見てみることにする。

3.1.1 『御製清文鑑』と『御製増訂清文鑑』に関する書誌的研究

『清語老乞大』『漢清文鑑』など朝鮮司訳院で出版された文献に関する研究が多く行われた中で、成百仁教授の初期満洲語辞典に関する研究は、清朝の初期辞典および言語に関する理解を深めた。そのような中、自然な流れとして『御製清文鑑』（1708年）と『御製増訂清文鑑』（1771年序）の版本に関する研究が多く行われた。これらの本はそのものが大部であり、本を比較対照するためには世界の多くの場所に収蔵されているので、その間には部分的な作業を行うしかなかった。けれども成百仁（他）(2008) は、韓国、中国、日本、モンゴルにある13種の『御製清文鑑』を比較対照し、次のような結論を出した（以下の内容は筆者が再整理したものである）。

> 「現存する『御製清文鑑』は大きく原刻本類と正本類に分けられ、大部分が正本類に属するが、原刻本1類に属するものとしてソウル大学中央図書館本があり、原刻本2類に属するものとして日本の京都大学文学部本がある」

[10] ネギダル語の om-kə-sun, ウリチ語の [UL2008] ʊmʊ-ksu, 加えてエウェン語で koolad-lilra təbəkiw と答えたのは、ロシア語質問紙で見知らぬ客が他の人の家を訪問する場合として設定されていて、2人称複数命令形となったケースである。すなわち ты (2Sg.)ではなく вы (2Pl.) に対する命令文となっている。

一方『御製増訂清文鑑』の書誌には、成百仁 (2003) と成百仁（他）(2004) の研究が行われた。韓国、中国、日本、モンゴルにある26種の『御製増訂清文鑑』を比較対照して、次のような結論を出した（以下の内容は、筆者が再整理したものである）。

> 「現存する『御製増訂清文鑑』は大きく原刻本類と覆刻本類に分けられ、どちらの場合にも補板が含まれている場合があるが、特に覆刻本類には、補板の種類が様々で多く存在する。中国第一歴史檔案館本が原刻本類に属し、ソウル大学中央図書館本は覆刻本類の後刷本に属する」

これにより、今西春秋 (1938) と今西春秋 (1966) で提起された版本の問題は一段落したと見ることができる。この他にも、この2つの辞典には鄭堤文（他）(2008)、高東昊 (2014)、金亮鎭 (2014)、朴相澈 (2015a), (2015b)、崔桂英 (2015a), (2017) などの研究が後に続いた。

高東昊 (2014) 「『漢清文鑑』の構成に関する分析的考察」『朝鮮学報』 231: 1-24.
金亮鎭 (2014) 「満洲語辞典『御製清文鑑』(1708)の辞典学的、言語学的意義」『韓国辞典学』 24: 33-66.
朴相澈 (2015a) 「『御製清文鑑』動詞類標題語の相部類」『言語学』 73: 133-156.
朴相澈 (2015b) 「『御製清文鑑』『清文彙書』『御製増訂清文鑑』の標題語比較： a sere hergen に限定して」『アルタイ学報』 25: 37-58.
成百仁 (2003) 「『御製増訂清文鑑』の異版本識別のための特徴調査」『韓国語研究』 1: 149-175.
成百仁・鄭堤文・金周源・高東昊 (2004) 「『御製増訂清文鑑』の異版本識別のための特徴調査［補遺］」『韓国語研究』 2: 93-98.
成百仁・鄭堤文・金周源・高東昊 (2008) 「『御製清文鑑』の版本研究」『アルタイ学報』 18: 31-58.
鄭堤文（他）(2008) 「満洲語辞典『御製清文鑑』(1708序) の研究 ―その意味解釈に注目して」『言語学』 52: 117-143.
崔桂英 (2015a) 「『漢清文鑑』満文詮釈の変改様相」『言語学』 73: 81-110.
崔桂英 (2017) 「『御製増訂清文鑑』新規標題語研究」『アルタイ学報』 27: 25-50.
今西 春秋 (1938) 「『増訂清文鑑』の異版に就いて」『史林』 23(4): 855-862.
今西 春秋 (1966) 「『清文鑑』 ―単体から五体まで」『朝鮮学報』 39・40: 368-410.

3.1.2 満洲語文献資料のデータベースDB（2012年～2015年）

ソウル大学言語学科歴史比較言語学の研究チームでは、韓国研究財団の支援を受けて満洲語文献のデータベース化作業を行った。

満洲語文献資料のデータベース化作業は、次のように進められた。プロジェクトのタイトルは「満洲語および満洲文学資料叢書構築」であり、2012年から2015年までの3年間に行われた。対象は満洲語辞典のほぼ大部分と『満漢西廂記』など満洲語で書かれた文学資料を含む。そして朝鮮で刊行された6種すべての満文文献を含んでいる。時期的には17世

紀末から18世紀中葉までの文献であるが、重要な文献をほぼすべて含んでいる。『満文老檔』などの歴史書は含まれていないが、それは大部であるからだけでなく、別に翻訳作業が進められていたからである。このプロジェクトを通じてデータベース化した資料リストは次の通りである。

1. 辞典類：

（1）『大清全書』(1683)：満漢辞典、十二字頭順配列、14巻14冊 [12,298個]
（2）『満漢同文全書』(1690)：満漢辞典、十二字頭順配列、8巻8冊 [11,217個]
（3）『同文彙集』(1693序)：漢満（一部満漢）辞典、分類（類内字母）順配列、4巻4冊 [8,110個]
（4）『新刻清書全集』(1699)：漢満辞典、分類順配列、5冊 [1,920個]
（5）『満漢類書』(1700)：満漢辞典、分類（一部字母）順配列、32巻8冊 [9,600個]
（6）『満漢同文類集（物名類集）』：漢満辞典、分類順配列、2巻4冊 [1,595個]
（7）『御製清文鑑』(1708序)：満満辞典、分類順配列、24巻26冊 [12,111個]
（8）『清文彙書』(1724)：満漢辞典、十二字頭順配列、12巻12冊 [13,660個]
（9）『御製増訂清文鑑』(1771序)：満満及満漢辞典、分類順配列、46巻48冊 [18,217個]

2. 文学類：

（10）『三國演義』(1722-1735?)：満漢合璧本、24巻8冊 [6,958ページ、49万余個]
（11）『金瓶梅』(1708)：満漢本、40冊 [5,804ページ、49万余個]
（12）『満漢西廂記』(1710)：満漢合璧本、4巻4冊 [340ページ、2万7千余個]
（13）『御製翻訳詩経』(1768序)：8巻4冊 [1,170ページ、3万9千余個]
（14）『択翻聊斎志異』(1848)：満漢合璧本、24巻24冊 [3,066ページ、21万余個]

3. 朝鮮で刊行された本：

（15）『同文類解』(1748)：漢韓満辞典、分類順配列、2巻2冊 [4,797個]
（16）『漢清文鑑』(1779?)：漢韓満辞典、分類順配列、15巻15冊 [13,640個]
（17）『清語老乞大』(1765序)：満韓テキスト、8巻8冊 [382ページ、1万1千余個]
（18）『三譯総解』(1774)：満韓テキスト、10巻10冊 [483ページ、1万6千余個]
（19）『小兒論』(1777)：満韓テキスト、1巻1冊 [26ページ、500余個]
（20）『八歳兒』(1777)：満韓テキスト、1巻1冊 [24ページ、500余個]

言語研究においてはコーパス資料が重要なだけに、これらのコーパスは韓国の満洲語の研究に大きく役立つものと期待される（https://ffr.krm.or.kr/base/td037/index.html で検索可能である）。これらのコーパスを利用して、これまでとは異なる満洲語文法または文法史研究が可能となり、崔桂英 (2015b), (2020), 都正業 (2017), (2019), 朴相澈 (2016), (2019) などの研究が行われた。

崔桂英 (2015b) 「満洲語程度副詞最甚語研究」『言語学』 71: 83-111.
崔桂英 (2020) 「韓国語と満洲語の直示複合動詞構文に関する対照研究」『アルタイ学報』 30: 55-80.
都正業 (2017) 「満洲語格標識 be の分布と機能」『言語学』 77: 181-206.
都正業 (2019) 「満洲語小詞 nikai と意外性の関係」『アルタイ学報』 29: 27-47.
朴相澈 (2016) 「満洲語終結語尾 -re と -mbi の分布と意味『満文老檔』を中心に」『言語学』 75: 43-68.
朴相澈 (2019) 「満洲語文語の文法変化：終結語尾 -ra の分布と意味を中心に」『アルタイ学報』 29: 49-74.

3.1.3 『満洲語および満洲文学資料叢書』の刊行

高麗大学民族文化研究院では「『満洲語および満洲文学資料叢書』刊行 ―資料調査、解題訳註を兼ねて―」というテーマのプロジェクトを2014年から2017年まで遂行し、その結果、既存の刊行物を含む満洲学叢書として次のような書籍が出版された。

第1巻 崔東権（他訳注）『清語老乞大新釈』 (2012)
第2巻 崔東権（他）『満洲八旗曾寿の日記』 (2012)
第3巻 崔東権（他）『オンドゥリ神が聞かせてくれる終わらない物語』 (2012)
第4巻 宋康鎬 『清代満洲語文献研究』 (2015)
第5巻 崔東権（他）『満文本 異域録』 (2018)
第6巻 崔東権（他）『満洲族の神話物語』 (2018)（原著： 烏拉熙春『満族古神話』）
第7巻 崔東権（他）『満漢合璧西廂記』 (2018)
第8巻 崔東権（他）『満文本 御製避暑山荘詩』 (2018)
第9巻 崔東権（他）『満文本 御製盛京賦』 (2018)
第10巻 金裕範（他）『満文本 欽定満洲祭神祭天典礼』 (2018)
第11巻 金裕範（他）『満洲語文法書資料集成』 (2019)

このうちの『満洲語文法書資料集成』は、満洲語文献中での漢文で書かれた文法説明である「翻清虚字講約」、「虚字講約」、「清文助語虚字」、「語録解」、「清文指要」、「清文接字」、「重刻清文虚字指南」および「字法挙一歌」を翻訳したものである。

3.1.4 『満文老檔』の翻訳と研究

『満文老檔』とは、満洲人が自分たちの歴史を有圏点字で書いた歴史書である。20世紀初頭に発見されて以来、多くの研究が行われ、日本では全巻が翻訳されることにより（1957年～1962年）、満洲語研究のみならず東洋史研究にも大きな影響を及ぼした書物である。後に中国でも翻訳が行われた。韓国では、次のように翻訳が行われた。

高麗大学校 民族文化研究院 (2017) 『満文老檔 訳注』 太宗1-4. 昭明出版.
金周源（他）(2019) 『満文老檔』 太祖1-2. ソウル大学校出版文化院.

日本で翻訳された本は瀋陽の崇慕閣本を底本にしたが、今回の翻訳書は北京の内閣本を底本とした。それだけでなく上記の金周源（他）(2019) は、一次翻訳が終わった後で瀋陽の遼寧省歴史檔案館にあるマイクロフィルム本と対照し、以前の翻訳本にある誤謬を踏襲しないよう努めた。これらの研究は、無圏点字で記録された『満文原檔』の研究に拡大されていった。関連研究として都正業 (2015), 金周源・李亨美 (2017), 崔桂英（他）(2019), 金慧 (2018), (2019) などがある。一方で崔東権 (2007) は、『舊満洲檔』の一部を翻訳したものである。

金周源・李亨美 (2017) 「『満文原檔』から『満文老檔』への内容改変に関する研究」『人文論叢』 74(3): 11-47.
金慧 (2018) 「満洲語表記に反映された満洲語と漢語の口蓋音化」『言語学』 80: 53-73.
金慧 (2019) 「『満文原檔』の漢字音表記について —声母の表記体系を中心に—」『アルタイ学報』 29: 1-25.
都正業 (2015) 「『満文老檔』と『満洲実録』の満洲文対照研究」『アルタイ学報』 25: 1-35.
崔桂英（他）(2019) 「『満文老檔』韓日翻訳本の表記と翻訳差異：底本による差異を中心に」『アルタイ学報』 29: 115-138.
崔東権 (2007) 『舊満洲檔 荒字檔』 宝庫社.

3.2 満洲語口語やシベ語などの満洲ツングース諸語研究

満洲語口語は現在、中国黒龍江省のチチハル市三家子村と黒河市四季村で、ごく一部の高齢者が用いている。既存の資料と現地調査資料を利用した満洲語口語に関する研究としては高東昊 (1999), 金周源 (2014), 都正業 (2020) などがあり、金周源（他）(2020) ではこれまでに知られている満洲語口語資料を分析し、現在の学界では語彙資料は比較的多くのものが収集されたが、言語を正しく理解して再活性化するための文章資料が不足していることを指摘し、今後はこれに関する研究が必要であることを強調した。一方でシベ語に関する研究としては高東昊 (2004), 都正業 (2019) があり、姜熙朝 (Hijo Kang)（他）(2017) はエウェン語に関して、高晟衍 (Seongyeon Ko) は満蒙言語の母音調和に関する論文を書いた。

高東昊 (1999) 「三家子満洲語の i 予期同化」『アルタイ学報』 9: 11-38.
高東昊 (2004) 「シベ語の音韻構造研究」『アルタイ学報』 14: 1-21.
金周源 (2014) 「満語口語中的輔音濁音化現象（満洲語口語における子音の濁音化現象）」『満学論叢』 4: 306-316.
金周源（他）(2020) 「満洲語口語の再活性化のための基礎研究 —最後の話者が語った自身の生活と言語」『アルタイ学報』 30: 1-33.
都正業 (2019) 「満洲語口語とシベ語口語の文法対照 —格標識と語尾を中心に—」『東洋学』 77: 185-206.
都正業 (2020) 「満洲語口語願望法語尾変化の1つの様相 —シベ語口語との対照的観点か

ら―」『アルタイ学報』 30: 35-53.
Kang, Hijo, et al. (2017) Vowels of Beryozovka Ewen: An acoustic phonetic study. *Altai Hakpo*. 27: 1-23.
Ko, Seongyeon. (2012) Oroch vowel harmony revisited. 『言語学』 63: 31-53.
Ko, Seongyeon. (2018) *Tongue Root Harmony and Vowel Contrast in Northeast Asian Languages*. Harrassowitz Verlag.

最後になるが、以前に何例かの満韓辞典が出版されたものの、語彙全体を網羅していなかったという問題点があった。最近になって李勳により10年間の努力の末に『満韓辞典』(2017) が出版された。この時点には主見出しと副見出し語を合わせて47,808個（このうち主見出しは19,229個）が収録されており、B5サイズで941ページある。例文も豊富に掲載されており実用性の高い辞典だ。

また李聖揆らによって『金史』全体の翻訳が出版された（李聖揆（他）(2016)）。

李聖揆（他）(2016) 『国訳 金史』 1-4. 檀国大学校出版部.
李勳（編著）(2017) 『満韓辞典』 高麗大学校民族文化研究院.

4. おわりに

以上で韓国でのアルタイ諸語研究の状況を走馬看山式に（訳者注：「走馬看山」とは「概観する」を表す四字熟語）述べた。前世紀の間には、アルタイ諸語研究と言えばすぐに比較言語学的研究、すなわち韓国語系統論とほとんど同じ意味と見なされた。しかし、その中の主な仮説であったアルタイ諸語間の親縁性について懐疑的な見解が増え、徐々にアルタイ言語間の系統的関係性よりも、文法構造など言語類型論の観点からアルタイ言語を見るようになった。

特に1990年代から、すべての言語学者は絶滅危機に瀕している言語を記録して言語多様性を守ることが責務だという見解が台頭し、多くの言語学者が言語記録 (Language Documentation) 作業に飛び込んだ。韓国の言語学者たちも例外ではなかった。大多数のアルタイ系言語は絶滅危機に瀕していたのだ。それゆえ2000年代からは、アルタイ諸語が韓国語系統論の対象ではなく、絶滅危機の言語記録の対象になったのだ。

本稿は大きく二つの部分に分かれ、前半では韓国の学者たちが行ったアルタイ諸語の言語記録作業を紹介し、後半では満洲ツングース諸語に関するそれ以外の研究について紹介した。このように最近20年ほどの研究を総合して検討することにより、現在の韓国でのアルタイ諸語に関する研究がどこに来ているのかを知ることができるようになった。今後のアルタイ諸語研究では、これらの現地調査資料の分析と技術を基にして、言語学的に意味のある方向に発展していくことができると期待しても良いだろう。

参考文献

Ikegami, Jiro. (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker*. Berlin: Akademie-Verlag. 271-2.

Kazama, Shinjiro. (2003) *Basic Vocabulary(A) of Tungusic Languages*. Publications on Tungus Languages and Cultures 25. ELPR Publications Series A2-037. Suita: Osaka Gakuin University.
津曲 敏郎 (2016) 「文法調査票に基づくウデヘ語例文」『北方言語研究』第6号, 153-178.

Present and Future of Altaic Language Studies in Korea: Focusing on the Study of Manchu-Tungusic Languages

Juwon KIM
(Seoul National University)

Keywords: Manchu-Tungusic, documentation, endangered languages, linguistic diversity, corpus

This article introduces the current research status in Altaic languages in the last two decades, paying particular attention to Manchu-Tungusic languages. This paper can be divided into two parts. In the first part (section 2), I describe the documentation of endangered Altaic languages focusing on Manchu-Tungusic languages. In the second part (section 3), I describe the current status of research on Manchu-Tungusic languages.

Our field research team conducted language documentation of Altaic languages, keeping with the "documentation of endangered languages to maintain and preserve language diversity" that linguists worldwide have been working on recently. We used the same questionnaire from the beginning of the documentation. The questionnaire consists of approximately 2,700 vocabulary items, 344 sentences containing daily conversation, and 380 sentences for describing grammatical structure. We surveyed the following languages from 2000 to 2019.

Tungusic (11 languages): Ewen, Ewenki, Manchu, Nanai, Negidal, Orochi, Sibe, Solon, Udihe, Uilta, Ulchi;

Mongolic (8 languages): Bonan, Buriat, Dagur, Dongxiang, East Yugur, Kalmyk-Oirat, Mongolian, Monguor;

Turkic (20 languages): Altai, Bashkir, Chulym Turkish, Chuvash, Crimean Tatar, Dolgan, Fuyu Kirghiz, Gagauz, Karaim, Kazakh, Khakas, Kirghiz, Sakha, Salar, Shor, Tatar, Turkmen, Tuvan, Urum, West Yugur.

In section 3, I review the studies on publications and languages. The bibliographical information and the relationships of the different editions of the Manchu dictionaries Yuzhi Qingwenjian (御製清文鑑, 1708) and Yuzhi Zengding Qingwenjian (御製增訂清文鑑, 1771) were investigated respectively. We also built a searchable database (DB) containing the two dictionaries mentioned above, the early dictionaries of the Manchu language and the entire Manchu texts published during the Joseon period. Furthermore,

the publications including Manwen Laodang (滿文老檔), Man-Han Hebi Xixiangji (滿漢合璧 西廂記, 1710), etc. have been translated into Korean, and many phonological and grammatical investigation on Manchu and Tungusic languages have been done.

Over the past twenty years, we gathered linguistic materials of thirty-nine Altaic languages through field research, translated the significant publications written in Manchu, and established Manchu DB. In the future, utilizing the data thus constructed, we have high expectations to achieve linguistically meaningful results in historical linguistics and language typology.

（キム・ジュウォン　kjwn@snu.ac.kr）